# 秋田實作／村井富男改訂　『家』　翻刻

【翻刻凡例】
○常用漢字内の漢字は常用漢字に直した。
○促音の「つ」は、現行表記の「っ」に直した。
○句読点は、適宜補い、現行の表記に従って、読点を句点に直した箇所もある。また、セリフの最後、ト書きの最後には句読点を省いた。
○頁の移りは、」を入れて示した。

秋田　實　作
村井富男　改訂

『家』　二場　」

場割
第一場　町会の事務所
第二場　公園の中

時　現代　―　秋

所　ある大都会

人
町会長　石村清作　」
児島隆子
丸山つね
その孫　照子
町会役員　坂田重太郎
熊谷
町会事務員　町田
婦人会員　時村
伊藤
山田
東　」

進藤　　」

五十嵐夫人

第一場　町会の事務所

舞台面

平舞台、ある街角にある三角形の平家、舞台正面は、二階建のアパートの部屋部屋、立ち木が間隔を置いて、数本植えられてゐる。上手よりに電柱、その前の道路は、事務所から右と左に分れている。事務所のその角は、以前はそこが入口らしく、三尺位の両方から開く硝子戸であるが、今は、そこに町会の掲示板が掛けられ、その下にはポスターな」どが掛ってゐる。事務所の出入りは、舞台正面の横からで、硝子戸は取はづされ、向ふ側の横は硝子戸が嵌ってゐる。事務所の上手奥は畳敷の二重、この正面に戸棚、その他を置く。土間には、机、町会文庫の棚、物入れの棚、椅子等よろしく配置する

秋晴れのある日の午前、賑かな音楽で幕開くと、日婦の制服を着た町会」婦人部の勝村、伊藤、山田、東、進藤等が慰問袋に慰問品をセツセと詰めてゐる。照子（十二、三）も健気に手伝ってゐる

経済部長の熊谷と事務員の町田は、街路のリヤカーに、詰め終わった慰問袋を次ぎ〳〵と」積んでゐる

町会長石村（六十位）は髭を弄びながら、街路を往き来しつゝ頻りと何事か考へてゐる。時々立ち止っては、手にした紙片を視る。（彼は今、坂田の作詞した小唄に作曲中なのである）」

坂田重太郎（六十三、日露の勇士、矍鑠としてゐる。いつもステテコを穿き、胸に子供のやうな丸い腹巻をしてゐるので、「金時」の渾名が付いてゐる）が、自慢の小唄が出来た誇りと、石村に作曲を頼んだ後悔で、複雑な表」情をし、石村に尾いて同じやうに往き来してゐる。

婦人達の笑声が、時々起る

石村　（ニヤリと首肯き）出来たよ、金時さん！

坂田　お、出来ましたかーーー？

石村　（おはら節で唄ふ）ヘ雁と燕の季節のたより　風のたよりに　オハラ」ハ花だより　ヨイ〳〵　ヨイヤサ

坂田、熊谷と顔見合はせて、くさる

石村　感心せんかな……

坂田　もう結構ですよ、会長――――

と原稿を取戻さうとする

石村　待った〳〵（草津節で唄ふ）

へたよりいろ〳〵数ある中に　ドツコイシヨ、欲しいたよりは　コオリヤ　た」
だ一つ――
　終りが字不足で巧く唄へないので、唄返すが駄目
坂田　ただ一つよ　チヨイナ〳〵
　と、坂田が「よ」を付けて唄ふ。石村、坂田の顔を見る。坂田、顔を顰めて
　原稿を取戻さうとする
石村　（デカンショ節で）へ欲しいたよりはかず〳〵ござる　ヨイ〳〵　南の」たより
に……あとの半年ア……南のたよりに……はゝは……どうしても駄目
だ
　と紙片を坂田に渡す
坂田　会長の歌は神経痛ですよ。節々が痛んでゐる
　と、石村と哄笑する。熊谷、町田も和す
熊谷　流石の会長も手を上げましたな
石村　ナニ、音を上げたんだよ」
　再び哄笑する。
　婦人達この間に詰め終る。
時村　会長さん、終りましたわ
町田　（最後の一つを積み終って　軍隊口調で）積載終りッ！
石村　ご苦労さま……　皆さん、けふは本当にご苦労さまでした。ま、一服して下さ
い。
　一同は莨を喫ったり、」汗を拭いたりする
　照子がお茶を淹れて配って歩く
伊藤　兵隊さんに喜んで戴けたら　妾達の疲れなんか、何んでもございませんわ
東　えゝ、さうですとも
熊谷　弄びますよ。慰問袋や慰問文は、前線と銃後を結ぶ、いはゞ一本の温い糸みたい
　なものですからな。」私もあの喜びだけは未だに忘れませんよ
石村　その喜びが、兵隊さんを元気づけるンです。慰問袋が送れなければ、たより、い
　ろ〳〵でいゝンですよ
　と、坂田を見る。坂田、剽軽にお辞儀する
石村　要するに、形でなしに真心です
熊谷　さしづめ時村さんなどは、受取った兵隊さんから、結婚の申込みが」あるンぢや
　ないですか
時村　あら、こんなお婆さんに？
熊谷　時村千鶴子なンて名はどう考へても若い感じですからなア

一同笑ふ

時村　五十を過ぎてちや悪いわね

伊藤　いゝわよ。そこは思ひやうで、廿五の娘さんを一遍に二人、奥さんに貰ふと思へば……

町田　廿五の娘さんを二人ね……」

一同朗らかに笑ふ

石村　照ちやん、ご苦労だったね

照子　いゝのよ、会長さん。あたしこの中のどれか一つが、お父さんに行くンだと思ふと、とつても楽しかったわ。

石村　さうだな、恤兵部へこれを納めると、南へ行くか、北へ行くか、お父さんの手に渡らないとはいへない」

坂田　お父さんは、今何処にゐるンだい？

照子　大抵北の方か、ソ連国境か、支那か、でなければ、南の方か……

坂田　それだつたら、全部ぢやないか

一同笑ふ

照子　えゝ、さうよ。手紙の来ない間は屹度何処かの戦場で、元気に戦争してゐらつしやるンだつて。私にお婆様いつも話すわ」

石村　ふうむ、お婆様がね

坂田　お父さんがゐないと、やっぱり淋しいだろうなア

照子　う、う、ちつとも淋しくないわ。だってお婆様がいつもお父様の小さい時分のことを話して下さるの。だから、私、この頃お父様の夢をよく見るわ。小父さん、夢って妙なものね。夢の中で、お父様はいつもよりニコ〳〵笑って元気」なの。私、たまっていることを一遍にお父さんにいはうと思ふンだけど、いへないの。無理に話さうと思ふと、ハツとそこで夢がさめて了ふのよ。お婆様に話したら、お婆様もよくお父様の夢を見るンですって……

と、自分自身に話す如く早口に喋る

一同、照子の気持につま」されて、婦人達の中にはソッと涙を拭く者もある

照子　お父様からは御手紙来ないけど、兄さんからはよく来るわ。

石村　うむ、繁君は元気かい？

照子　えゝ、この間、始めて練習機に乗ったンですつて

坂田　ほう、たうとう乗ったかーーー

照子　（誇らしげに首肯く）」

町田　始めて少年航空兵として飛行機に乗った時、繁君は一体、どんな気持がしたんだらうよ……？

照子　兄さんの手紙に書いてあったわ。これが本当の飛び立つ思ひですって……

一同、笑ふ。

この時、下手から町内の五十嵐夫人が出てくる」

五十嵐　今日は、皆さん。ご苦労さんです

一同会釈する

五十嵐　（町田に）済みません、鳥渡、町会の証明して下さいな。

と、紙片を手渡す

町田　病人の滋養物ですね

と、事務所の中へは入って捺印する

石村　（五十嵐に）ほう、誰が？

五十嵐　かず坊ですの。消化不良で……大」したことはないと思ふンですけど

石村　ははア、甘い物の過食ぢやないですか

五十嵐　まア、会長さん、過食する程有れば結構なンですけどね

石村　それなら安心だが、何処でどう無理をして来るものか、子供はいつも、何か変ったお菓子を喰べてますよ

坂田　これが本当の、子故の闇ですな」

五十嵐始め一同クスクス笑ふ

石村　笑ひごとぢやない。だから、いやこれは五十嵐さんにいふ訳ぢやないが、だん〳〵子供を弱くさして、了には病気にさせて了ふ.

坂田　正に、闇の報ひですね

石村　だから、やみ患ひといふンだよ

一同哄笑する

町田　（五十嵐に）これを警察に持って行」って、証明をお貰ひなさい

五十嵐　はい、有難うございました。皆さん、ご免なさい。

と、上手へ紙片を持って去る

石村　さア、それぢや、ご苦労序にもう一ト運びお願ひしませうか。

時村　はい〳〵

一同四辺を片付け、街路に出る」

五十嵐が引返してくる

五十嵐　もう一つお願ひがあったンですけど……私、うっかりして……

石村　どんなことです？

五十嵐　近頃畠が荒されて困ってゐるンですけど、ご近所にも被害が相当ありますの。町会の方で、何とかなすって戴けませんでせうか？

伊藤　あら、私の方にも、此の間からチョイ〳〵被害がありますのよ」

熊谷　国策を妨害する畠泥棒は、打棄っては置けませんな、会長――。

石村　金時さん、お前さん、この事に就て何か聞いてるかね？

坂田　三百五十世帯を与（あづか）る町会の庶務部長、坂田の金時です。チヤンと聞いてます。犯人は、夜更けにボロ自転車を持って歩く婆アだといふ話です

石村　ほゝう、ぼろ自転車の婆アかーーー」
　照子はハツとして、逃げるやうに揚幕へ去る
町田　（不審気に）照ちやん……、照ちやん……
石村　よろしい、五十嵐さん、何んとか致しませう。安心して、増産に精出して下さい
五十嵐　まア、さうですか。ぢや、どうかよろしくお願ひ致します
　と、上手へ去る」
坂田　どれ、それぢや、作曲を依頼に出かけるかな
町田　誰方に頼むんです？
坂田　それア、児島さんより無いよ
町田　あア、春の遺家族慰問演芸会に、あなたの三味線を弾いた、七組の児島隆子さん……
熊谷　あの人、元は芸者だったといふぢやありませんか
坂田　うむ、さうした昔の職業に似ず」悪い感じの無い女でな、それでお交際を願ってるといふ訳さ
石村　金時さん、儂は、その児島さんの事で、お前さんに話があるンだ。もう暫く此処に居て欲しいな
　坂田、何かいはうとするが、思ひ止まって、元へ掛る
野村　会長さん、それぢや行って参ります」
石村　あア、ご苦労さまーーー町田君、よろしく頼んだよ
町田　はい
　婦人達がリヤカーを引いて、下手へ去る。熊谷、町田続く
石村　金時さん、お前さんは、児島さんの裁判沙汰を知ってゐなさる筈だな
坂田　あア、随分、久しい前から知って」ます
石村　ふむ、それで、お前さんはご本人の児島隆子さんに、年寄の功なり、町会の役員でもあり、一応ご注告はしたのだらうな？
坂田　滅相もない、私は別に……
石村　ほう、これは驚いた。あンたは、嫁と姑の裁判沙汰に頬被りなンぢやな？
坂田　頬被りぢやありません。私は、他」人の家の出来事に、口を出したくないのです
石村　他人？他人とは驚いたね。日本人は皆同族ですぞ。一軒の家の家族に等しいものなんですぞ。然も同町内に住んでる者が、他人といふやうな考へでゐて、町政が巧く運用出来ますか！
坂田　これア、ご挨拶ですね、会長さん、口を出すのも事と次第によりけり」ですよ。家族の出来事には、第三者で判断し難い問題がありますからな
石村　嫁と姑が、法廷で財産を争うー、いはゞこれは血で血を洗ふ醜態ですぞ。あンたは、これに未だ判断の余地があるといふのかね？
坂田　児島さんは、主人と死別されて三年経ちますが、近所でも評判の善く出来た方なン

です。その方が訴」訟されるからには、屹度児島さんに正しい主張が有るのでせう
石村　主張とは何んです。儂はその主張といふのが気に入らん。嫁しては夫に従ふべき女が、姑と嫁の中で、法律の力をかりてまで貫き通さねばならぬ主張なぞが在るのですか
坂田　然し……
石村　（かぶせて）金時さん、日本の婦」道は、ケ条書きの条文に照し合せて、善悪を定めるやうな、そんな浅薄なものぢやありませんぞ。尤も、芸者上りの児島さんには日本の女の道つてものが、解らんのかも知れん。（間）だから、儂は注告をした上で、反省を促したいと思ふ
　その時、児島隆子（廿八、九、昔芸者だったと）は思へない）が、下手奥の道路から出てくる
隆子　今日は……ご苦労様です
　石村と坂田は、突然噂の主が現れたので、流石にどぎまぎする
坂田　や、これは……今、お向ひしようと思ってゐたンですよ
隆子　まア、さうですか。何か妾に？
坂田　はア、また節付けをお願ひしたい」と思ひましてね。尤も、節を付ける程のものか、どうか、これは勿論解りませんが……はゝは……
隆子　小唄なンですね。鳥渡、お作を拝見願へません？
坂田　どうぞ〳〵……
　と、懐中から原稿を出して手渡す
隆子　（読み）たよりいろいろ〳〵……へこかれて待ちます　戦地のたより　負」けずにあげましよ　ササ銃後のたより……いゝお作ですわ
坂田　紘にのりますかな……
隆子　結構だと思ひます、ほんとに……。でも、折角ですけど、妾もう此処にはをりませんから……
坂田　えツ、それぢや……？
隆子　故郷へ帰ることにしましたの。それで、居住証明書を戴きに参りましたのよ。（石村に）お手数でせ」うけど……お願します
　と原稿を坂田に返す
　坂田心残り気に受取る
石村　（決然と）児島さん……
隆子　はア……？
石村　こんな事を無躾にいふのは、失礼かも知れんが、何とか円満に解決する方法はないもんでせうかな
隆子　致し方ございませんわ

石村　由んば、どんな事情があるにせよ」亡くなられた貴女のご主人のお母さんぢやありませんか、その親と法廷で財産争ひをする……何んとか考へ直せないものでせうか？

隆子　……已むを得ませんわ……

石村　児島さん、あンたは、日本の「家」に対する精神をお考へになられたことがありますか？

隆子　（無言）

石村　家長を中心に、一家が睦じく暮し」て行くが為めには、長幼の序なり、或ひは夫唱婦随なり、必ずそこに美徳が必要なンです。いや、「家」は美徳の生れる泉なンですよ。これが、日本の家族です。われ〳〵が、国家を家と考へるのも、国体の有難さに由ることは無論ですが、この家は生れ育ったればこそぢやありませんか、日本の強さは、この一つの血で継がってゐるところ」にあると思ひませんか

隆子　一つの血ですって――？……　妾は児島家へ嫁いで来た他家の女です

石村　それが間違ってる、その考へが間違ってゐるのです

隆子　いゝえ、妾は今でも、自分が正しいと信じてをります

石村　然し、あンたは児島家へ嫁いだ日から、児島家の家族であり　あンたの體には児島家の血が流れてゐ」る筈です　お母さんも亦、息子に嫁を迎へることは、同時に、自分の娘を迎へることにならなければ、なりません。恐らく、お姑さんもそのお考へで、あんたを迎へられたと思ふのです

隆子　（溜息と共に眼を伏せる）

石村　嫁と姑――これは言葉が悪いので、本来は母と娘でいゝことなンです。母娘の中で法律の力をかりなけ」れば解決出来ないやうなことが、昔からありましたか

坂田　（愈々居辛くなって）会長、もういゝぢやありませんか、児島さんも……

石村　いや、儂は別に児島さんを責めてゐるンぢやない、町内の恥だと思ふから、役目で反省を願ってゐるのです

隆子　（キッとして）町内の恥ですって」――会長さん、妾は今日まで、誰方様にもご迷惑は少しもおかけしてゐない心算です

石村　さういふ意味ぢやないのです、日本婦道の亀鑑に照らして、もう一度、思ひ直して欲しいと考へてるだけなンです

隆子　（必死に）でも、日本婦道は、正しい者に、何処までも味方だと信じます」

石村　勿論、正しい者の味方です。然し自分本位の正しさには、味方してゐない筈です。個人の我を主張して、同族牆に相鬩ぐ醜態は、これは米英流の思想です。日本の「家」の精神には、絶対に通じない考へ方です。児島さん、戦場に我子を送る銃後の母をご覧なさい、産んだ子は生れると同時に、国家の子として捧げてゐる――この考へ」この立派な考へが、果して何処から生れると思ひます？……家です。国家を家と見た家族の精神です

隆子　（弦が切れた如くガツクリと）その子……そのお国へ捧げる子が妾にありましたら……

　と崩れる如く掛ける

坂田　（意外な面持で）えツーー？

石村　児島さん！

隆子　母だったら……妾が子の母だった」ら、今度のやうなことは起らなかったのです……いえ、起らなかっただろうと思ひます。児島と結婚して、見送るまでの六年間、児島はどんなに子供を欲しがったことでせう、私は医者にも診て貰ひました。お灸も据えて見ました。子供の出来るといふ、方々の温泉にも行きました、人のよいといふことは、禁厭でも何でもやって見ま」した、しかし、駄目でしたわ、諦めて、子供を貰ふことに決めてをりましたが、その話の纏らぬ中に、児島はポツクリ亡くなっつたのです。ご存じのやうに、児島は一人子です。後継者の無い家――会長さん、妾は家を考へてない女ではございません。児島と別れた日から、絶えず妾の心を悩まし続けたのは、児島家の後継者のことで」した。考へあぐねた末に、春の児島の三年の法事を済ませた後で　妾は、決心してお母様に離縁して下さるやう申上げたのです　妾のやうな石女の代りに、立派なご養子をお迎へになれば、児島の家は絶へないで続いて行きます　児島の家の為めに……妾は考へたのでした

坂田　それが、いけなかったのですな」

隆子　児島の家を思ふ真心だけは誰にも通じるものだと思ってゐたのです。でも、妾の話を聞いた親戚の方達は、何もかも芸者上りのせゐにして、寄って集って私を、皆に都合のよい悪者に仕上げて了ひました、その挙句に、家風に合はないなどと……此処では恥かしくて申上げられないやうな酷い言葉をさん〳〵聞かされたンです。妾だ」って、女の道は心得てゐます。でも、こんなにまで誠意を踏みつけられ、悪名を背負って出て行けるでせうか……児島の妻である妾が児島の家を……ご事情を聞けば、なる程ご尤もだと思ひます。然し、そこまで深くお考へになってゐるのでしたらもう一歩進めて……

隆子　いえ、黒白はもう決まりました」の

　とスツクと立つ

　石村、坂田不審気に見戍る

隆子　裁判は、妾が勝ちましたのよ

　と誇らしげに微笑する

石村　証明書は、後で戴きに参りますから……

　と静かに揚幕へ

　この時、照子（小さな）風呂敷包を下げる）が揚幕から出て来る

照子　小母さん、今日は！

隆子　今日は！　何処へ行くの？

照子　お婆様のお内職を届けにーー
隆子　さうお、気をつけて行ってらっしやいね
照子　ありがと
　　隆子去る
照子　会長さん、お婆様がね、今夜の出」征遺家族慰問□会の招待状を誰かほかの人にあげて下さいって
　　と白い封筒を机の上に差出す
石村　お婆様は行かないのか？
照子　えゝ　□□、さよなら
　　と下手奥へ去る
　　町田が下手から急いで出てくる
町田　会長、畠泥棒の犯人が判りまし」たよ
石村　え、犯人が……
坂田　やっぱりボロ自転車の婆アかね？
町田　七組の丸山つねさんだといふ□です
石村　えっ、照ちやんのお婆さんが……
　　と机上の封筒を取上げ、□っと見る
　　―暗転―　　」

第二場　　公園の中
　　舞台面
平舞台、町外れの空地の一部をちよっと手入れして、公園にしたといふ風な処、下手に国旗掲揚台、ラヂオ体操台があり、中央にベンチ一つ、上手に退避壕が見える。上手遠くに、郊外電車の高架、樹木諸処によろしく
その夜――九時半頃」四辺は深夜の如く静寂で、虫の声が降るやうに聞こえる
星月夜――
時々空に探照灯の光り
郊外電車の警笛と轟音で、明るくなると、石村がベンチに掛けて莨を喫ってゐる。軈」て所在なさに莨を捨てると、低く詩を吟じながら剣舞の真似を始める。虫の声、ハタと止む。石村、上手を透し見て、慌てゝ体操台の蔭に隠れる
丸山つね（六十位）が照子と子供用自転車を両側から持って、上手」から出る
つね　照子や、よく見てご覧　――
照子　誰もゐないよ、お婆様
つね　もし誰か来たら、直ぐに知らすンだよ

照子　えゝ、しつかり見張ってるわ
つね　本当に、こんなとこ見つかるといけないからね
照子　大丈夫よ。……お婆様、今夜は巧くやってね。私、見てゐてハラ」ハラするわ
つね　お婆様だって、照子以上に怖いンだよ
照子　（フと下手を見て）あ、あれ、何かしら、私、向ふの畠を見て来るわ
　と、下手へ走って去る
　つねは自転車を引いて、ベンチの傍にくる
　石村出てくる」
石村　丸山さん！
つね　あツ、会長さんーー
石村　こんな処で、夜遅く、一体何をしてゐるンです？
つね　はい……
石村　お婆さん、若しも、こんなところを人に見られたら、どうする心算なンです？
つね　誠にどうも、お恥かしい次第で
石村　自分の立場といふものを、ようく」考へて下さい。あなたは大切な體なンですよ
つね　本当に年甲斐もないことでして
石村　あなたは自分では、別に何とも思ってゐないかも知れないが、こんな危ない事
　は、今夜限り思ひ止まって下さい
つね　済みません。ご心配をおかけしまして……
石村　戦地にをられる丸山さんや、少年」航空兵を志願した許りの繁君が、若しも万一
　この事を聞かれたら、どんな気持になられることでせう、お婆さん、何でも儂に
　相談して下さい。儂は出来るだけのことは、する心算です。あなた一人に気苦労
　は決してさせん心算です
　つね怪訝さうに石村の顔を見る
照子　お婆様、向ふの畠に、まだ里芋が」沢山出来てるわ
　と喋りながら戻って来る。石村を見て
照子　あら、誰かと思って吃驚したわ。今晩は、会長さんーー
石村　照ちやん、儂の顔を正面から、ヂツと見てご覧……　見られるかい
照子　見られるわ
　照子、石村の顔を見る」
石村　そして、毎晩、此処でお婆様としてゐることを、正直にいへるかい？
照子　いへるわ
石村　いってご覧！　毎晩、何をしてるか大きな声で、いってご覧？
照子　自転車のお稽古！
石村　照ちゃん！　小父さんは何もかも知ってるンだよ！
照子　何もかもって、会長さん、何を知ってらっしゃるの？……変だわ」ねえ、お婆

様

石村、つねと照子を見較べて訝る

つね　会長さんは、私が自転車の稽古をしてるのを、ご存知のことかと思ってゐましたが、では、ご存知ではなかったのですか？

石村　自転車の稽古――――？

つね　それでは、何か私共が、ほかの善くない事でもしてゐると……？」

石村　いや、そんなことは……

照子　畠泥棒でもしてゐると思ったの、会長さん……

石村　そ、そんなことは真逆か

と、困窮の態

つね　会長様、いつもいろ〳〵と親身になって　私共のことをご心配下さいまして　本当に涙の出る程有難く存上げてをります

石村　いや、別に……」

つね　疑はれても仕方のない話でして、誰が、私が自転車を稽古してゐるといっても信じませう。然し、私は自転車の稽古をしてゐるのです。会長様、お笑ひにならないでお聞き下さいまし

と、石村を促し、ベンチに並んで掛ける

照子は自転車を凭せかけると、夜間飛行機」の爆音を追って下手へ去る

隆子（旅行姿、ボストンバッグを持つ）が、上手から出て、二人に気付き、

木陰に佇む

つね　あの繁のやつが、ヤツと飛行機に乗れるやうになったのでございます。繁は母の無い、お婆さん育ちの子で、甘やかされてゐるからと、」戦地のあの子の父からも何日も心配して申して来てをりました。私は甘やかして育てた憶えはないと信じてをりますが、さて繁を手許から離して見ますと、やっぱり、その事が気懸りで〳〵、繁、頼むから立派な少年航空兵になってお呉れと、心に祈り続けて参りました。然し、私が一つ一つ無駄に年をとって行く間に、繁のやつ」は立派に成人してくれました。飛行機に乗れるやうになったンです。戦地にゐる倅も、これを聞いたら、どんなに喜んでくれることでせう。会長様、日清戦争の時、私は八つでした。日露の時には、結婚した許りの夫を戦線に送り出しました。今度の戦争では、倅と一緒に孫までがお役に立ってくれました。これでいゝ、これで、繁が」私の分までご奉公してくれると、ホツと安心する下から、又、心配になるのです。年寄育ちの繁が、いざといふ時、皆様に後れを取りはしないだらうかと、考へ出したら、ゐても立ってもゐられず、出来ることなら、あの子の側へ飛んで行って、繁や、しっかりするンだよーーと叱ってやりたくなるンですよ。あの鳥のやうに大空を飛び廻」る飛行機の運転は、どんなでせう？　こんな地面の上を走り廻る自転車の運転でも、転んだり、ハンドルを取り損ったり、……会長

様、笑はないで下さい。私は、転んで涙の出るほど痛い時、あの子が飛行機の練習に一生懸命、汗みどろになってゐる姿が、はっきりと眼に浮んで来るのです。繁、立派に飛行機をど」ん〳〵撃ち落すんだよ。後ろにお婆さんが付いてるよと、私は毎晩、此処からあの子を元気づけてやってるのです……。然し、年寄は、何んて莫迦なことを考へるもンでせう。皆様に見られるのが恥かしく、夜遅くこっそり人眼につかぬやう、わざ〳〵此処まで稽古に来たんですが……会長様にも、えらいご心配をかけて、何」とも申訳ございません。もう、今夜限り、自転車の稽古は廃すこと致します

石村　いや、おやんなさい！手も足も疵だらけ、血だらけになるまで、どんどんおやんなさい。そして、遠い繁君を、眼に見えぬお婆さんの心の鞭で、ビシ〳〵励はしてやって下さい。私からもお願いします

つね　有難うございます。……有難う」ございます……

石村、フと隆子に気付く

石村　児島さんぢやありませんか……

隆子　（無言、涙を□□拭き近づく。つねの話に泣いてゐたのである）

石村　（チツト様子を見て）愈々故郷へお帰りになりますか？

隆子　（力弱く）その心算で、児島の家を出て来たのですけど……」

つね　まア、児島さんの奥様ぢやございませんか。こんなに遅くから……でも、お目出度うございます、裁判はやっぱり奥様がお勝ちになりましたのですってね

隆子　（益々力弱く）えゝ……

石村　然し、勝った児島さんの今の気持は、淋しくはないですか？

隆子　（ハツとして、石村を凝視する、無言）」

石村　勝つことは、あンたが、たつた一つの家を捨てることだった

隆子　（無言、泣けて来さうになるのをグツと堪える）

つね　奥様は、良い奥様になることだけをお考へになってゐて、お姑様のお嫁御になることも、お忘れになってゐたのではないでせうか？

隆子　（胸を打たれる思ひで、思はずボストンバッグを落す）お婆さ」ん———

つね　お姑様は、屹度、それがもの足らなかったのだと思ひます

隆子　済みません……済みません……、妾は三年の間仏に仕へることが、夫を亡くした妻の唯一つの道だと思ってゐました。姑に対する娘の道のあることを、忘れてゐたのです

石村　それに、気が付いてくれましたか」……

隆子　はい……

つね　奥様、差出た婆と思はずにゐて下さいよ

隆子　いゝえ、お婆さん、お蔭で女の道を踏み迷はずに済みましたわ

つね　奥様———

隆子　お婆さんーーー
　二人手を取って嬉しさに泣く」
石村　これで、わが町内は万々歳ですぞ……
隆子　会長さん、妾もお婆さんに負けず、銃後の家を戍(まも)りますわ。妾の家、児島の家を……
石村　戍って下さい。家を戍ることは国家を戍ること、日本を戍ることになるのです
　隆子首肯き返してボス」トンバッグを持つと、力強く大股に、元へ去る
　石村、つね見送る
石村　よかった〳〵……
つね　ほんとに……
照子　お婆様、自転車のお稽古はもう止したの？
　と、下手から走ってくる
つね　まだ〳〵、これからだよ」
照子　ぢや、あたしが持ってゝあげるわ
　と、自転車を持ってくる
石村　さあ、儂も手伝ひませう、お婆さん、遠慮なしにどん〳〵転びなさい。転んだら起してあげますよ
つね　はい、はい、まことに妙な恰好でして……
　と、自転車に乗る
　石村と照子は、朗らか」に笑ひながら、そのハンドルを持って助けてゐる
　この中に
　“幕”